

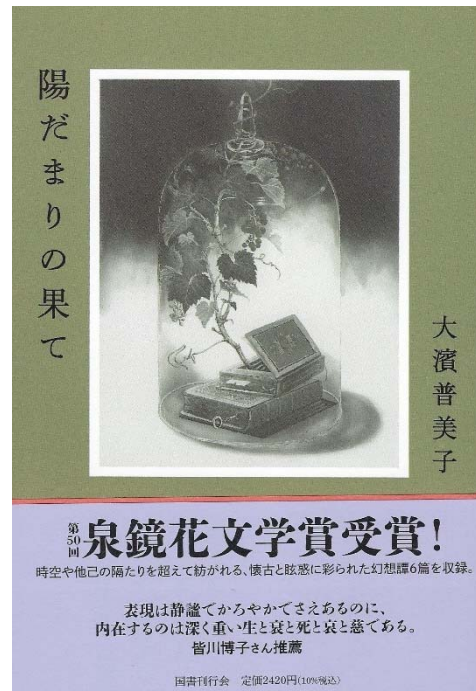
Newsletter Januar 2023

Renommierter Literaturpreis für unsere Dozentin Frau OHAMA Fumiko

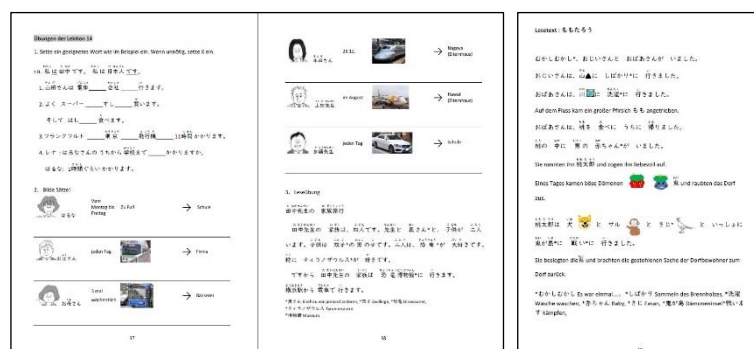
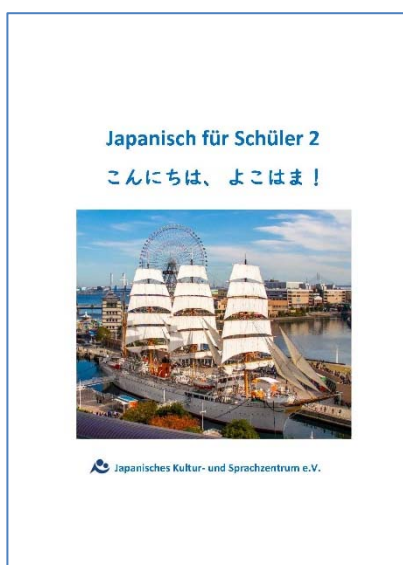
Viele von Ihnen kennen Frau Ohama, langjährige Dozentin des Sprachzentrums, und manche von Ihnen hatten das Glück, von ihr in Japanisch unterrichtet zu werden. Frau Ohama ist nicht nur erfahrene Dozentin, sondern auch erfolgreiche Schriftstellerin. Nun wurde ihr Werk „Hidamari no hate“ mit dem hochrangigen Izumi-Kyōka-Literaturpreis ausgezeichnet.

Eine Literaturkritikerin schrieb zum Buch:
Ihr Ausdrucksstil ist ruhig und sogar leicht, aber in ihm steckt ein tiefes und schweres Leben; Tod, Trauer und Mitgefühl. Wenn die Wahrnehmungen einzelner Person in ihren Erzählungen detailliert und gekonnt dargestellt werden, bekommt der uns so vertraute Alltag ein ganz anderes Gesicht. Es ist ein wahres Bild des Lebens, das für die Augen derjenigen, die an oberflächliche Ereignisse gewöhnt sind, seltsam erscheinen mag.

Der Izumi-Kyōka-Literaturpreis wurde 1973 anlässlich des 100. Geburtstages des Schriftstellers Izumi Kyōka (1873-1939) von der Stadt Kanazawa eingerichtet. Die bekannte Autorin YOSHIMOTO Banana erhielt 1988 denselben Preis für ein ihrer Erstlingswerke „Moolight Shadow“, welches im „Kitchen“ (deutsche Version 1992 Verlag Diogenes, übersetzt von Wolfgang E. Schlecht) enthalten ist. Ohama Fumiko „Hidamari no hate“, 376 Seiten, 2022 Verlag Kokusho Kankokai. ISBN 978-4336073433, 2240 Yen.



Das neue Lehrbuch für junge Leute ist da! „Japanisch für Schüler 2, Kon’niwa Yokohama“, (Hrsg.) Sprachzentrum, 2023



Das neue Buch enthält Texte, Vokabellisten, Grammatik, Übungen, Fragen zum Leseverständnis, Quizfragen, eine Liste nützlicher Ausdrücke und ein DE-JP/JP-DE-Glossar. Es wurde von den Dozenten des Sprachzentrums erarbeitet.

Bitte nehmen Sie sich ein Exemplar und schauen Sie es sich an.

Das Buch ist an der Rezeption des Sprachzentrums erhältlich: 124 Seiten, 8 €.

最近読んで面白かった本

川内有緒『目の見えない白鳥さんとアートを見に行く』
集英社インターナショナル、2021年

著者は、美術館学芸員の友人に誘われ視覚障害者の白鳥さんと絵の鑑賞に行く。白鳥さんは同行者に絵を描写してもらって、「耳で」見るのだ。同行者は「絵の解説」をするのではなく、白鳥さんが分かるように、絵を描写していくのだ。その過程で、物が見えているはずの同行者も、実は自分がよく見ていなかったことに気づく。そして、白鳥さんとの会話の中ではじめて絵を深く分析、鑑賞できるようになる。白鳥さんはこうやって、あちこちの美術館を巡り、障害者と晴眼者が一緒に作品鑑賞をするワークショップもするようになった。面白い。



ルシオ・デ・ソウザ/岡 美穂子『大航海時代の日本人奴隷』中央公論新社、2021年



南蛮貿易において、ポルトガル人による日本人の人身売買が行われていたことは学会では周知のことだが、史料が少ないので包括的な研究もほとんどなく、一般にはあまり知られていなかった。この本では、長崎にいたポルトガル国籍のユダヤ人一家の異端審問裁判記録から、同家の日本人奴隷の名前・経歴・生涯を導き出し、具体的な奴隷の一生を一般読者に分かりやすく描き出した。

その他アジア・南米に残る史料から、日本人奴隷の実態の一端を紹介している、日本人奴隷の中には、日本社会では一般的な「年季奉公」に似せた「年季契約書」を持つ者もいて、しばらく奉公に出るノリで、奴隷契約に応じていたらしい。面白いのは「日本で『奉公』と呼ばれてきた労働形態は、ヨーロッパでは『奴隷』契約としてとらえられ得るもの」という指摘だ

(つい、サービス残業など過酷な現在の日本の労働状況を思ってしまった！)。

奴隷契約を結んだ日本人の多くは、契約など無視するポルトガル商人に「終身奴隷」としてマカオ、フィリピン、ゴア、メキシコ、ペルー、アルゼンチン、ポルトガル、スペイン等へ売られて行った。彼らは途中で洗礼を受けて「キリスト教徒」になりポルトガルの洗礼名をもらい、南米では他のアジア人奴隷と同様「インディオ」と呼ばれた。中には自由民となって普通の生活を営んだ者もいたが、大半はの行方がわからないという。

いろいろ考えさせられる研究である。

Hiragana-Sudoku

„にほんごたのしいよ“ 日本語楽しいよ。Japanisch(lernen) macht Spaß!

	ん	よ	ほ			ご		
た	ご					い		ほ
ほ			た	に			よ	
	た			の		に		
	よ					ほ		
	ほ			た		よ	し	の
		の		ほ		た		し
				ん			に	い
ご			の	し	い		ほ	